

族であれば、広州や益州といった遠方の官など求めないであろう。この兄にしても、所詮「良吏」に分類される身分なのである。

- (34) 宮崎市定『九品官人法の研究』（同朋舎、一九七四年。また全集6、岩波書店、一九九二年）第二編・第三章の六「門地二品の成立」参照。宮崎氏によれば、郷品はインフレーション傾向にあり、東晋以降、貴族の多くは郷品二品を与えられていたらしいが、袁淑の場合、いかに忠節を尽くした非業の死であったとはいえ、大尉（二品官）を追贈されており、真に一流の貴族であったとみなしてよいであろう。

- (35) 川勝義雄「劉宋政権の成立と寒門武人——貴族制との関連において」（『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二年）参照。

- (36) 例えば方正58に、桓温がむすこのために王坦之のむすめとの縁組を申し込んだところ、王坦之の父王述に拒絶された逸話が見える。その王述のせりふは「軍人なんぞ、どうしてむすめを嫁がせることができようか（兵、那可嫁女与之）」であった。『世説』の中で高い評価を受ける桓温も、その軍人的要素に関しては、侮蔑の対象となるのである。もっとも『世説』は、桓温のむすめが王坦之のむすこに嫁いだという後日譚まで記している。

- (25) 『詩経』召南・甘棠に、「蔽芾甘棠、勿剪勿伐、召伯所茇」とあるのをふまえる。
- (26) ただ、劉裕はのちに謝混殺害を残念がったという（『晋書』謝混伝）。
- (27) ただし、王弘と謝靈運の仲は良くなかった。王弘は殺人罪で謝靈運を弾劾したこともある。ただ、これに謝混がからむと話は別である。『南史』謝瞻伝によると、謝瞻が「喜霽詩」を作り、謝靈運がそれを書し、謝混がそれを詠じた場にいた王弘は「三絶」（三つの優れたもの）と評したという。
- (28) 王弘に関わりのある人物が好意的に扱われる理由としては、王弘が江州刺史（四二〇—四二六）の地位に在ったこととも無縁ではあるまい。また劉義慶が荊州で採用した優遇制度（注30参照）は、王弘が江州刺史の時代に用いた政策のようだから、二人の間には、姻戚関係を除いても、かなり親密な関係があったと推察される。
- (29) 桓温の荊州刺史就任は三四五年、桓玄の任命によって桓石康がその地位に在ったのは四〇四年までだから、六十年間、途中約十年の空白期間はあるものの、桓氏は荊州に君臨しつづけたのである。
- (30) この点については、宮崎市定「六朝時代江南の貴族」（全集7、岩波書店、一九九二年）に、「南北朝を通じて貴族がその家名の永続を誇り得たのは、彼等が地方の州に地盤を有し、州の政府に出仕して地方政治を左右し、形勢がよければ中央政府に出て顯官となり、形勢非なれば州に引きこもって後図を策することができたからである」とあるのを参照。なお、『宋書』劉道規伝によれば、桓玄の死（四〇四年五月）後も、荊州、湘州、江州、豫州には桓氏の勢力が強く、しばしば徒党を組んで劉裕などの勢力に対抗し、劉道規は「皆な悉く之を平らげ」たという。しかし、六十年に及ぶ桓氏支配の影響が簡単に終わるはずもない。実際、桓謙の抵抗に際しては、その父桓沖の遺恵に感じた荊州の民の多くが呼応した（『晋書』桓謙伝、『宋書』劉道規伝）。のち劉義慶（劉道規の爵位の継承者）が荊州刺史となり、州の内政の指導的役人（の親）を優遇する制度を作ったのも、桓氏勢力との融和を図る政策だったのではないだろうか。
- (31) いまだ正確な数字を得ていないが、『世説』は桓温および桓氏に関する逸話のほか、荊州に関わりのある人物の逸話を比較的多く収載しているように思われる。
- (32) すでに見たように、『語林』が廃れた理由について、『世説』は謝安に関する記事の誤りを挙げているけれども、根本的には、著者の裴啓が文人として無名であったことが影響しているように思われる。なぜなら、これもすでに見たとおり、袁宏の『名士伝』は謝安の語った冗談をまとめた書物であるにもかかわらず、『語林』のように廃れたとは記されていない。それは袁宏が一流の文人だったからではないか。
- (33) 陸展の伝記は兄陸徽の伝（『宋書』良吏伝）に附されて「弟展、臧質車騎長史・尋陽太守、質敗、從誅」とあるにすぎない。その兄陸徽は、広州刺史、益州刺史を歴任したが、これは政績を認められて得た官職であり、門地が高かったわけではない。そもそも門地の高い貴

- (10) 「竹林七賢論」は、『北堂書鈔』卷一三三・服飾部二・凡二十一、『太平御覽』卷七一〇・服用部二・凡に見えるが、ここでは、より詳しい後者を引いておく。「魏朝封文王、固讓、公卿皆當喻旨、司空鄭冲等、馳使從阮籍求其文、立待之、籍時在袁孝尼家宿、扶而起、書几板為文、無所治定、乃写付信」。なお『北堂書鈔』は「宿」の下に「醉」があり、それが正しいと思われる。
- (11) この点に関しては、旧稿四五五―四五八頁を参照。
- (12) この部分、『世説』の諸本は「傳」を「博」に作るようだが、箋疏に引く李慈銘説のように、「博」は「傳」の誤りであろう。
- (13) 例えば文学77の逸話、庾亮に関する賦について、もと「亮」に作ったところを「潤」と改めたのは庾亮の諱を避けた話と解釈すべきであろう。また排調33に見える庾爰之と孫放の応酬は、互いに相手の父親の諱を犯す言葉のやりとりを活写したものである。
- (14) 『建康実録』卷一二に、「(傳)亮至兄迪墓、拜辞告罪、追擒廷尉、上亦使以詔謂曰、以公江陵之誠、当使諸子無恙、(徐)羨之子喬、(謝)晦子世休、並賜死、……流(傳)亮妻子於建安郡」とある。また『宋書』の徐羨之伝、傳亮伝、謝晦伝を参照。
- (15) 謝安は『世説』で最も多い、百十六条の逸話に登場する人物である。
- (16) 『晋書』王彪之伝に、「(桓)温遇疾、諷朝廷求九錫、袁宏為文、以示彪之、彪之視訖、歎其文辭之美、謂宏曰、卿固大才、安可以此示人、時謝安見其文、又頻使宏改之、宏遂逡巡其事、既屢引日、乃謀於彪之、彪之曰、聞彼病日増、亦当不復支久、自可更小遲廻、宏從之、温亦尋薨」とある。
- (17) 『太平御覽』卷二一六に、袁宏が謝安に宛てた書簡の一節が引かれ、「聞見擬為吏部郎、不知審爾、果当至此、誠相遇之過」とある。
- (18) この「従外祖」という表現を見れば、袁湛の母方の祖父の代に謝氏と婚姻関係を結んだ者がいたはずだが、いまだ詳らかにしない。
- (19) 『晋書』卷六五では「王琨」に作るが、小論では『世説』劉孝標注に従う。彼は王導の次子王恬の子であるが、長子王悦に跡継ぎがなかったため、その後継者となり、王導の爵位を襲いだ。
- (20) 原文は「又云」に作るが、意味が通じない。何かしら脱文のある可能性も否定できないが、ここでは「人云」の誤りとして解釈した。
- (21) この点に関しては、旧稿四六〇―四六一頁を参照。
- (22) 原文は「王公」に作るが、諸家の説に従って「黄公」に改めて解釈した。
- (23) 『世説』と『語林』の関連については、旧稿の注(5)を参照。
- (24) この時代の人々の伝記を読むと、「某々の知る所と為る」とか「某々の賞する所と為る」といった表現が頻出する。これは単に「知遇を得た」とか「賞賛された」とかいっただけでなく、その仲間に加えられたという意味をも含むのではないか。つまり仮に派閥争いのごときものが起こった場合、某々の側につくことが公認された関係である。それは、いささか唐突な比較だけれども、後世の科挙における試験官と受験者(合格者)の關係に近いのではないか。

所、一九八七年)。以下「旧稿」というのはこの論文をさす。

- (3) 旧稿は『世説』の撰者として寒門出身者の存在を強調したものであるが、のちに見るように、袁淑は一流貴族に属する人物であり、もし彼が『世説』の編纂で中心的役割を担ったのであるならば、旧稿の結論は成立する根拠を失うことになる。

- (4) 『宋書』謝靈運伝附。なお何長瑜の伝記はさらに「廬陵王紹鎮尋陽、以長瑜為南中郎行參軍、掌書記之任、行至板橋、遇暴風溺死」とつづく。劉紹が南中郎の將軍号を帯びて江州刺史の地位にあったのは、四四三―四四九年であり、何長瑜はこの時期にその幕下に招かれたことになる。

- (5) 劉義慶の怒りを招いた原因が陸展らの府僚を嘲笑した「劇言苦句」にあったとすれば、一つ無視しえぬ事実が浮かび上がってくる。何長瑜の転出先の會城は広州刺史の管轄する県であるが、元嘉十五年(四三八)八月、陸展の兄陸徽が広州刺史に任命されているのである。この人事と何長瑜の処分との間には何らかの関連があるのではないだろうか。もともと、たとえ関連があるとしても、陸徽の広州刺史在任の期間は元嘉二十一年までだから、何長瑜の會城令転出が劉義慶の荊州刺史時代(元嘉十六年二月まで)のことである証明になるわけではない。

- (6) 『宋書』文帝紀による。劉義慶は江州刺史になる前、荊州刺史であったが、文帝紀によれば、この年の二月、衡陽王義季が荊州刺史に任命されており、約二ヶ月の空白が生じている。この空白を疑問としたのであろうか、万斯同「宋方鎮年表」は、劉義慶の江州刺史任命を二月としている。

- (7) 太尉は孝武帝即位後に追贈された官名。

- (8) こうした考え方に基づく行論は旧稿にも共通するものであるが、ここでは小南一郎「『世説新語』の美学——魏晉の才と情をめぐって」(中国中世史研究会編『中國中世史研究 続編』京都大学出版会、一九九五年)から次の文章を引用させていただく。私の考え方をより適確に示しうるからである。氏は劉孝標の注釈を「基本的に歴史家の方法」とみなしたうえで、こう述べておられる。

それに対して、「世説新語」の編纂者たちの意識と方法は、歴史家が過去の事跡の記録に対する際の厳密さとは別のところにあったようにみえる。劉孝標の注の引用しているような史料が、「世説新語」の編纂者たちに、まったくみられなかったとは考えにくい。むしろ、この書物が、歴史的には疑義のある異伝の方をわざわざ選択したのは、編纂者たちの主體的な判断によるものであったと考えるべきであろう。編纂者たちは、歴史記録としての正確さには必ずしも拘泥せず、その内容について主體的な判断基準をもって収集を行ない、時にはその内容に変形をも加えたのだと推定されるのである。

- (9) 以下『世説』を読む際に底本としたのは、余嘉錫『世説新語箋疏』修訂本(上海古籍出版社、一九九三年)であり、篇名の下に数字は底本に付された番号である。なお、句読については改めた箇所もある。

と考えるからである。

ふつう元嘉年間には貴族制が最も完備した時期とされる。この六朝時代を特徴づける貴族制を支えていたのが九品官人法などと呼ばれる官吏登用制度である。これは本来、才徳ある人士の登用をめざす制度であったが、たちまち形骸化し、家格の高下だけが問われる体制へと変質する。門閥貴族による政治体制である。元嘉年間の貴族制の完備も、この門閥体制の強化にほかならない。もつとも、それは寒門武人が抬頭し<sup>(35)</sup> 軍事権（実権）を掌握した状況下における、きわめて形式化した門閥体制にすぎなかったけれども。

このような時代に『世説』は生まれた。この書物は、表面的に見れば、魏晉時代の人士の逸話集にすぎない。しかし、その逸話の多くが人物批評であり、才徳ある者に対する称賛、しからざる者に対する批判を主要内容としていることを思えば、それは単なる逸話集の域をこえ、撰者たちの主張を含む書物であると考へざるをえない。その主張は多岐に亘り、ここで軽々に結論を出すことは慎みたいが、ただ一つ、元嘉の世にあって、才徳なきにもかかわらず、高い家格を拠り所として繁栄する者たちに対する批判が存在する可能性は指摘してよいであろう。もし、この指摘に誤りがなければ、『世説』編纂の中心に位置した者として、門閥政治に反発する「寒門出身者」の存在が浮かび上がってくるであろう。そしてまた『世説』にただよう軍人嫌悪の傾向<sup>(36)</sup>を加味して言えば、この書物の編纂は「寒門文人」が中心的役割を担ったのではないかと判断されるのである。

注

(1) 『世説新語』の編纂——元嘉の治の一側面（『六朝貴族制社会の研究』岩波書店、一九八二年）。

(2) 「世説の撰者について——語林との相違に見る世説撰者の立場」（川勝義雄・礪波護編『中国貴族制社会の研究』京都大学人文科学研究

の名は分らない。おそらく陸氏の末流にすぎないであろう。これに対して袁淑は、著作佐郎で起家しているところから、「門地」一品を与えられた身分であったことが知られる<sup>(34)</sup>。また父は丹陽尹という要職に就いている。そして何よりも代々、陳郡の謝氏や琅邪の王氏と婚姻関係を結んでいたことが袁氏の家格を示している。つまり劉義慶幕下の文人集団の中で、袁淑は唯一の一流貴族であったと思われる。いわば異分子的存在であり、それは彼に居心地の悪さを感じさせたであろう。さらに『世説』の編纂に即して言えば、彼の不満を招いた原因としては、彼の意向がこの書物の編纂に反映されなかったという状況を想定せざるをえない。それは結局、『世説』の編纂が一流貴族を排除する形で、すなわち二三流の貴族、さらには寒門出身者を中心になされたことを意味しよう。この結論は旧稿で論じたところに同じい。たとえ袁淑が撰者の一人であったとしても、旧稿で得られた結論を改める必要はないと考えている。

## おわりに

およそ『世説』の撰者を特定する作業には、直接に編纂過程を示す資料の欠如が決定的な障害となっている。そのため小論では、ある人物を想定することによって『世説』の内容が合理的に説明できるならば、その人物が編纂に関わった可能性が大きいという考え方に基づく論を展開した。ただ、これが論者の恣意に左右されやすいという欠点をもつ方法であることは否めない。例えば、小論に即して言えば、謝尚や王珣を好意的に取り扱うことが事実だとしても、それが直ちに袁淑と結びつくのか疑問視されても仕方がない。小論で、あくまでも「より合理的」な説明が可能というレベルの話であると断った所以である。こうした危険を承知しながら、あえて強引な推論を積み重ねてきたのは、『世説』という書物が劉宋の元嘉年間に編纂された理由を説くキー・ワードが「寒門出身者」さらにいえば「寒門文人」ではないか

荊州刺史であったとき、編纂の中心にいたのは何長瑜で、『世説』の骨子はできていたものの、まだ完成には至っていなかった。そして何長瑜が転出したのち、荊州の幕府には彼の仕事を継承できる人材がなかった。むろん『世説』のごとき逸話集をまとめる作業は困難でないにせよ、『語林』の轍を踏まない<sup>(32)</sup>ためには、名のある文人の参画を得て権威づける必要があった。そこで白羽の矢を立てられたのが、「文は当時に冠たり」と評判の袁淑である。劉義慶が彼を招いたのは、『世説』の完成はもとより、その事実上の撰者として袁淑の名を欲したためではないか。荊州よりも都に近い江州であれば、袁淑の承諾が得やすいという計算もはたっていたであろう。かくして袁淑は何長瑜の仕事を継承する形で『世説』の編纂に当たった。当時、おそらくこれは周知の事柄であった。さればこそ、劉義慶の弔問に訪れた何勗が袁淑に何長瑜の将来を語ったのであろう。

ところで、何勗が「これで何長瑜も帰還することができます」と語ったのに対して、袁淑は「国家が英明な宗室の一人を失ったばかりのときに、流人のことなど考えるべきでない」と答えたのだが、この言葉の中に袁淑の何長瑜に対する嫌悪感のごときものを読み取ることはできないであろうか。そして袁淑と何長瑜の関係が『世説』の編纂を媒介として成り立つものであるならば、その嫌悪感は『世説』の編纂そのものに由来することになろう。つまり袁淑は『世説』の編纂にタッチしたことを本意と感じていたのではないかと疑われるのである。このような疑念を禁じえないのは、劉義慶の幕下にいた期間の短さが気になるからである。なぜ請われて就いた官を短期間で辞したのであろうか。はじめに述べたように、従姉の袁皇后の死が離任の契機となったのかもしれないが、その底流には劉義慶幕下での生活に対する不満があったのではないか。その不満の真の原因を探ることは不可能に近いが、ただ一つ指摘したいのは、彼の出自が他の僚属より高かったという事実である。劉義慶の幕下に集った文人にうち、何長瑜と鮑照は東海の人というだけで、いかなる家系かは全く不明である。また陸展は呉郡の人というから、江南の名門陸氏の出身である<sup>(33)</sup>に相違ないが、父祖

うが、同時に、袁淑が編纂作業に参加する前に、『世説』がほぼ骨子を整えていたからだとも考えられる。川勝氏は何長瑜を真の撰者とする前提に基づいて、『世説』の骨子が荊州の幕府ですでにできあがっていたはずだと論じられたが、私は逆に、『世説』の骨子が荊州時代にできていたことを前提として、荊州の幕府で最も文名の高かった何長瑜がクローズ・アップされてくるのだと考えたい。

ここで私が荊州の幕府において骨子ができあがっていたと推測する理由は、一つには、前述のように江州幕府の文人集団の中心的存在であった袁淑の果たした役割がさほど大きくないからである。また一つには、『世説』が桓温を好意的に扱っている点に注目するからである。桓温は九十四条の逸話に登場するが、この登場回数は謝安の百十六条につぐ。

しかもその人物像は決して篡奪をねらう野心家ではない。豊かな教養をそなえた文化人、優れた政策を行いうる政治家たる桓温である。それが桓温の実像であると言ってしまえばそれまでだが、やはり『世説』の扱い方には桓温を立派な人物に仕立てようという意識が明瞭である。それは結局、桓温が久しく荊州刺史の地位にあり、かつ、彼の死後も、桓豁、桓冲、桓石民、桓玄、桓偉、桓石康という桓氏一族がその地位を継承した<sup>(29)</sup>ことに由来するのではないか。確かに劉義慶の荊州赴任は、桓温の死から六十年ほど隔たったことであり、また異なる王朝下の出来事ではあるけれども、荊州という土地は、桓温および桓氏との関係を有する人々が多かったであろう。とりわけ州の役所や軍府などでは、刺史や將軍（たいていは兼務）を頂点とする「官」レベルの異動は頻繁であったが、実務の大半を担う「吏」レベルの役人は、上級の異動とは関わりなく在職しつづけたはずだから、劉義慶が荊州に赴任した当時も、桓温らの恩顧を被った「吏」の子や孫が役所にいたに相違ない。さらに桓氏自身が荊州政府の中で一定の官職を得ていた可能性も否定できない。<sup>(30)</sup>『世説』が桓温を好意的に扱うのも、そうした土地や役所の環境下で編纂作業がなされたからだと推測するのである。<sup>(31)</sup>

このように見てくると、『世説』の編纂過程については、次のように言えるのではないか。編纂の開始時期は劉義慶が



つに、謝靈運が謝混に目をかけられた存在であつたことを挙げうるかもしれない<sup>(27)</sup> 付言すれば、謝靈運は袁淑の伯父袁湛の岳父謝玄の孫である。

もっとも、『世説』が王弘に関わる人物に好意的であつたとして、その理由を袁淑の存在だけに求めるのは不十分であろう。幕府の盟主劉義慶自身が王弘と姻戚関係にあつたからである。『宋書』王僧達伝に、「太祖、僧達の蚤慧なるを聞き、徳陽殿に召見し、其の書学及び家事を問うに、応対閑敏なり。上、甚だ之を知り、妻わずに臨川王義慶の女を以てす」とあるのがそれである。王僧達は王弘の末子、大明二年(四五七)、三十六歳で獄死したから、生年は西暦の四二二年となる。劉義慶のむすめとの婚姻が成立した時期は断定できないものの、右の『宋書』本伝の記事を読めば、王僧達の少年時代かと推測される。さらに不良少年とつきあう王僧達の素行を心配した劉義慶が僧侶の慧観を遣わしていることも、その推測の根拠となろう。ともかく姻戚関係は袁淑が劉義慶の幕下に招かれた元嘉十六年(四三九)までには成立していた可能性が大きい。したがって『世説』が王弘に関わる人物を好意的に扱うのは、劉義慶の意を体した結果だと言えるかもしれない<sup>(28)</sup>

#### 四 『世説』の編纂過程

以上、『世説』の中から、袁淑と関係の深い人物が登場する逸話を取り上げて、袁淑が『世説』の編纂に関与した可能性を探ってきた。その結果、袁淑を撰者の一員と想定することによって、『世説』の取り扱い方を「より合理的」に説明できる逸話の存在が確かめられたように思う。しかしながら、袁淑が関与したのは、一一三〇条に及ぶ逸話の一割にも満たないであろう。その主たる理由は『世説』が文人集団の撰述という形で成立した書であることに求められるであろ

つながる取り扱いをしているのである。あたかも『語林』の存在価値は王珣の賦を収録した点にのみ求められているかのようである。さらにまた謝氏との関係でいえば、本来王珣のライバルとすべき謝琰（謝安の子）について、『世説』はわずかに二度、しかも脇役的存在として登場させているにすぎない。こうした事実は、『世説』の撰者の中に、王珣に好意的な人物がいたことを示すものではないか。そこに王珣の子の王弘に認められた<sup>(24)</sup>体験をもつ袁淑の存在が浮かび上がってくるように思われる。

ところで王弘と仲の良かった人物として謝混の名を挙げなければならない。彼は『世説』に四度登場する。うち一例は、彼が王珣の推薦で孝武帝の晋陵公主に尚するに至る経過を述べた逸話（排調60）であり、その内容は前掲のとおりである。また言語105、雅量42の逸話に見える謝混は脇役的存在にすぎない。注目すべきは規箴27である。

桓玄が謝太傅（謝安）の屋敷を兵舎にしようとした。謝混が言った。「召伯の仁は、恩恵が甘棠にまで及んだ<sup>(25)</sup>のに、文靖（謝安）の徳は、五畝の宅を保つことさえできないのか」。桓玄は恥じてやめた。

これがいつころの事件かは不明だが、少なくとも桓玄が政治の実権を握ったのちの逸話であろう。あるいは篡位後の出来事であったかもしれない。ともかく桓玄の意に逆らうことは死を意味するような状況下における、謝混の気骨ある態度を称賛する逸話である。この謝混を称賛する逸話の存在が問題になるのは、彼が劉裕（宋の武帝）に反抗して死んだ劉毅に加担して誅された人物だからである。『世説』は宋代に編まれた書であり、宋を建国したのが劉裕である。その建國者に対立する勢力にくみして殺された人物を称える逸話を載せることは、ふつうには考えられない<sup>(26)</sup>。そこには謝混を好意的に取り扱おうとする意識が明瞭であり、そうした態度で『世説』の編纂に携わった人物がいたはずである。仮にそのような人物を想定できるとすれば、謝混の親友であった王弘に関連して袁淑の名を挙げてもよいであろう。そしてそれは陳郡の謝氏に好意的な他の撰者の支持を得やすい逸話でもあった。『世説』が謝靈運の逸話を取り上げる理由の一

王東亭の「酒壚の下を経るの賦」について述べた。読み終わると、謝公はまったく批評せず、ただ「きみはなんと裴氏の学をしているのか」と言った。これより『語林』は廃れた。現存するものは、みな以前の写本で、もう謝安の言葉はない。

この条の注に引く『続晋陽秋』によれば、『語林』は晋の隆和年間（三六二）、河東の裴啓が漢魏以来の優れた言語表現をまとめた書物である。かなり好評を博し、裴啓は続編を書き足したらしい。おそらく書き足した部分に謝安の言葉があり、右の逸話のような結果を招いたのであろう。この逸話の中で、王珣はただ「酒壚の下を経るの賦」の作者として登場しているにすぎない。しかし『続晋陽秋』では、「後ち太傅（謝安）の事を説きて実ならず、而して人有り、謝の坐に於いて、其の黄公の酒壚を叙ぶ。司徒の王珣、之が賦を為る。謝公、加うるに王と不平なるを以てし、乃ち云う、君、遂に復た裴郎の学を作すかと。是れ自り衆は咸な其の事を鄙しめり」と記している。つまり『続晋陽秋』は、『語林』の記事に基づいて意見を述べる人物に対する謝安の批判の理由として、王珣との不和を加えているのである。前述のごとく、両者の不和は『世説』にも見える話柄であり、その撰者たちも熟知していたであろう。したがって謝安が王珣の文学作品について快く思っていなかったことも理解していたはずである。にもかかわらず、右に挙げた軽詆24の逸話では、彼の賦に関して謝安は何の批評も下していない。つまり彼の文才は否定しようもなかったのである。ちなみに『世説』が『語林』について触れている逸話はもう一つあり、それも彼の賦に関連がある。文学90にいう、

裴郎が『語林』を著し、世に出るや、遠きにも近きにも広く伝えられた。流行を追う若者はみな伝写し、それぞれ一本を有していた。王東亭作の「黄公<sup>22</sup>の酒壚の下を経るの賦」を収載し、はなはだ才情に富んでいた。

軽詆24の逸話から知られるように、『世説』は『語林』に批判的である。実際には『語林』を参考にした逸話もあるが<sup>23</sup>この先行する類似作品への対抗意識が濃厚である。その『世説』にして王珣の賦に限っては、一貫して肯定的な評価に

他の諸人と異なる行動をとった。したたかな計算に基づく行動である。そもそも『晋書』本伝に、「時に（桓）温は中夏を経略し、竟に寧歳なく、軍中の機務、並<sup>み</sup>な（王）珣に委ぬ。文武数万人、悉く其の面を識る」と記されるように、彼は行き届いた心くばりを持ち前としていた。ところで、彼は桓温死後の政界のリーダー謝安と絶交状態にあった。もと彼は謝安の弟謝万のむすめを娶り、彼の弟王珣は謝安のむすめを娶るというように、両者の仲は悪くなかった。その間に「隙」が生じはじめたのは、おそらく謝安が実権を握り、陳郡の謝氏が琅邪の王氏を凌駕する地位を占めるに至つてからのこと<sup>(21)</sup>と思われる。そして謝安の在世中、彼は政権の中枢に加わる機会が与えられなかった。しかし、謝安も彼を無視することはできなかった。賞誉147にいう、

謝公（謝安）が中書監だったとき、王東亭は用事があつて一緒に役所へ出なければならなくなった。王東亭は遅れて来て、席がつまっていた。王と謝は絶交していたが、太傅（謝安）はそれでも膝をちぢめて彼を入れてやった。王東亭が平気な表情なので、謝公は目を見張った。帰宅してから劉夫人に言った。「さきほど阿瓜（王珣）に会ったが、もとより得難い人物だ。もう関係はないけれども、まったく人を感服させる」。

両者の絶縁関係は謝安が死ぬまで続くが、それでも謝安の死に際して、王珣が弔問に訪れたことを『世説』は記している（傷逝15）。ところで謝安との関係に即していえば、『語林』という書物を介して興味深い事実が浮かび上がってくる。軽詆24にいう、

庾道季（庾敳）が謝公（謝安）に告げた。「裴郎（裴啓）が述べています。『謝安が言った。裴郎はなかなか悪くない。もう酒を飲む必要もあるまい』と。裴郎はこうも述べています。『謝安は支道林（支遁）を批評した。まるで九方臯が馬を見立てるように、その毛色にこだわらず、その優れたところだけ取る』と。謝公は言った。「まったくそんなことは言っていない。裴が自分でそんな言葉を作ったにすぎない」。庾道季ははなはだ納得がゆかず、そこで

される）、謝安と王洽の仲は悪くなかったと思われる。ともかく『世説』が第一の人物として扱う謝安の讃辞を得たのだから、兄の王恬よりはるかに高い評価を受けていたことを窺わせるに十分である。それは『晋書』本伝が「(王)導の諸子中、最も名を知らる」と記すとおりなのであろう。ただ品藻83で王珣が慨嘆するように、早世したためか、王洽を主人公とする逸話は少ない。むしろ注目すべきは王珣である。彼に関する逸話は二十四条あり、しかも高い評価を受ける形で登場する場合がほとんどである。雅量39にいう、

王東亭(王珣)が桓宣武(桓温)の主簿となった。すでに父祖の官籍を継ぎ、立派な名声があったから、桓公はその才能や家柄が役所中の評判なることを願った。はじめ、挨拶をするのに作法を間違えたが、表情は平然としていた。座中の賓客たちは嘲笑したが、桓公は言った。「そうではない。あの表情や態度を見るに、きっと凡人ではあるまい。私がいずれ試してみよう」。のち、月初めの朝会の折、御殿の下に侍っていると、桓公は中から馬を走らせ、まっすぐに王珣めがけて突進させた。左右の者はみな逃げまどい倒れ伏したが、王珣は微動だにしなかった。かくして名声が上がり、みな言った。「宰相の器である」。

桓温の幕下に在った時代の逸話である。泰然自若とした態度が「公輔の器」という最大級の讃辞を得たのである。ただし、それが王珣の自然なふるまいであったのか、計算された行動であったのかは不明である。捷悟7にいう、

王東亭は宣武の主簿となり、ある年の春、石頭(桓遐)兄弟と馬に乗って郊外に出かけた。同行した当時の名士たちは、くつわを連ねて兄弟と一緒に進み、王東亭だけが一人で数十歩ほど前にいた。諸人はその理由が分からなかった。やがて石頭兄弟は疲れてしまい、急に輿に乗って帰った。諸人は従者のようになり、王東亭だけが堂々として前にいた。その察しのよさはこのようであった。

石頭兄弟というのは幕府の盟主桓温の息子たちである。その息子たちが長い乗馬に耐えられないことを予知し、王珣は

この逸話の面白味は、息子を批判した言葉が王導自身にはねかえるところにあるのだが、王恬に対する評価が低いことに変わりはない。おおむね『世説』に見える王恬は精彩がない。それは『晋書』本伝に、「少くして武を好み、公門の重んずる所と為らず」などと記される彼の人となり、『世説』の価値基準からすると、高い評価を与えるに値しないものであったからかもしれない。しかし、「性 傲誕、礼法に拘らず」とか、「技芸多く、弈碁を善くし、中興第一と為す」（ともに『晋書』本伝）であつたから、巧芸や任誕の篇の主役たりうる資格は有していたはずなのに、『世説』は取り上げていない。このように『世説』は王恬・王混父子に対して冷淡ともいえる態度をとっているのである。その理由であるが、少し想像を逞しくすれば、袁淑が王誕の子や孫たちを嫌っていたためではないかと考えられる。なぜなら、袁淑の兄の袁濯が早世したのち、妻の王氏は苦勞して遺児の袁粲を育てたのだが、実家からは何の援助もなかったらしいからである。むろん嫁いだ者やその家族を援助する義務はないにせよ、人情として王氏の実家に対する反発があつても不思議ではないであろう。

それでは、同様に姻戚関係にある王弘について、『世説』はその父王珣、祖父王洽をどのように扱っているのだろうか。まず王洽であるが、『世説』には五度見える。賞誉ⅡⅣにいう、

以前、僧の竺法汰が北から来て無名のころ、王領軍（王洽）はその生活の面倒をみた。いつも一緒に行動し、名士のもとを訪れるたびに同行した。法汰がいなければ、車を停めて行かなかった。そのため名声が上がった。

竺法汰の名声が上がったのは、王洽に重んじられたからであり、それは王洽自身の名声が高かったからにはかならない。また賞誉ⅡⅣにいう、

謝公（謝安）が王右軍（王羲之）に手紙を送って言った。「敬和（王洽）のおちつきぶりは大変すばらしい」。

のちに触れる予定だが、謝安はむすめを王洽の次子王珉（王珣の弟）に嫁がせており（ただし婚姻は王洽の死後と推察

誕の族弟である。もしこの姻戚関係が『世説』の編纂に何らかの影響を及ぼしているとすれば、袁淑が『世説』の編纂に関わった可能性も高くなるであろう。ただし王誕も王弘も『世説』には登場しない。したがって、その影響についても、彼らの周辺の人物の取り扱い方を見る以外にない。

まず王誕の父王混<sup>(19)</sup>についてである。『世説』の中で王混が主人公となっている話はない。彼の名が見えるのは、わずかな一例、排調42である。

桓豹奴(桓嗣)は王丹陽(王混)の姉妹の子である。容貌が舅<sup>おじ</sup>に似ており、桓は大そうそのことを嫌っていた。宣武(桓温)が言った。「いつも似ているわけではない。ときどき似ているだけだ。いつも似ているのは容貌で、ときどき似ているのは精神だ」。桓嗣はますます落胆した。

この逸話の主役は桓嗣と桓温であり、王混は桓嗣の舅として登場するにすぎない。桓嗣が容貌ばかりでなく、精神も舅の王混に似ていることを嫌ったというのだから、王混の評判はすこぶる悪かったと想像される。直接に批判されたわけではないが、王混にとって不名誉な逸話である。その王混の父王恬は王導の第二子に当たる。『世説』では六つの逸話に登場するが、彼の人物像もまたかんばしくない。徳行29にいう、

王長豫(王悦)はまじめで素直な性格であり、親に仕えるに、その顔色を見、その心になうよう孝養を尽くした。

丞相(王導)は長豫を見るたびに喜び、敬豫(王恬)を見るたびに怒った。(後略)

これも直接に王恬を評した話ではないが、兄の王悦との比較を通じ、その人間性が批判されていたことを窺わせる逸話である。彼はどうも王導に嫌われていたらしい。容止25にいう、

王敬豫はハンサムであった。王公(王導)に挨拶した折、王公は彼の肩をたたいて言った。「おまえ、残念なことに才能が伴っていない」。人び<sup>(20)</sup>とは言っていた。「敬豫はすべて王公に似ている」。

外祖謝安の知る所と為り、其の兄の子（謝）玄の女を以て之に妻わす」であり、父の袁豹も「亦た謝安の知る所と為る」であつた。ついでながら袁湛のむすめが嫁した謝絢は、謝安の次兄謝拠の曾孫に当たる（いずれも『宋書』卷五二）。袁氏と謝氏の縁組といえ、『世説』排調60に次のような話が見える。

孝武帝がむすめの婿えらびを王珣に頼んだ。「王敦や桓温のようなスケールの大きいものは、いまや求めようもないし、少し思いどおりになると、人様のことに口出しをしたがつて、まったく求めるものではない。真長（劉惔）や子敬（王献之）レベルが最適だ」。王珣は謝混を推挙した。のち袁山松が謝混と婚姻を結ぼうとした。王珣が言った。「君、皇帝の膳に近づいてはいかん」。

ここに登場する謝混は謝安の孫であり、孝武帝のむすめの晋陵公主に尚した。結局、謝混と袁氏の婚姻は成立しなかったけれども、右の逸話は、袁氏と謝氏が子々孫々に亘って婚姻を結びうる関係にあったことを物語っている。このように袁氏は謝氏との関係が密接であり、また謝安の知遇を得た者が多かったから、袁淑が編纂に関わっていたと仮定しても、旧稿で指摘した『世説』の謝氏に好意的な撰述姿勢、さらに謝安を最高の人物として取り扱う撰述姿勢に、何ら不思議はないであろう。なお、謝混については次節でも取り上げる予定である。

### 三 袁氏と王氏

当然ながら袁氏の姻戚関係は謝氏に限られない。本節では謝氏のライバル琅邪の王氏との関係を見てみよう。袁淑のごく親しい縁者に限っても、次兄袁濯は王誕のむすめを娶っている。王誕は王導の曾孫である。また袁淑の伝に「十余歳に至り、姑夫王弘の賞する所と為る」とあるから、父袁豹の姉妹のだれかが王弘に嫁していたことになる。王弘は王



袁虎（袁宏）は若いころ貧しく、年貢米運びの雇われ人夫をしていた。謝鎮西（謝尚）は船旅をしており、風が清々しく、月も明るい夜、川の中洲の商人の船から詩を詠じる声が聞こえてきた。はなはだ風情があった。朗唱される五言詩も、まだ聞いたことのないものであり、感嘆してやまなかった。すぐさま詳しく尋ねさせると、袁宏が自作の詠史詩を詠じていたのである。そこで彼を迎え入れ、大いにほめたたえた。

袁宏が謝尚の知遇を得た事情を示す逸話である。『晋書』文苑伝に立てられた袁宏の伝記によると、これを機会に彼は謝尚の幕下に迎えられている。さらに考察の範囲を広げ、陳郡の謝氏との関係でいえば、袁宏は謝尚のみならず、謝安とも浅からぬ因縁があった。文学94にいう、

袁彦伯（袁宏）は『名士伝』を書き上げると、謝公（謝安）に示した。謝公は笑って言った。「私はかつてみんなに西晋時代のことを話したが、あれは冗談にすぎない。彦伯はそれを書物にしおった」。

袁宏と謝安の関係が成立した時期は定かでないが、桓温の死（三七三年七月）の直前、二人は「共同作業」を行っている。すでに篡位の野心を露わにした桓温に対して、なんとか阻止せんとする謝安は、袁宏に禅讓劇用の文章を作らせた。当代随一の文章家であった袁宏の作だから、立派な文章であったはずだが、謝安は書き直しを指示した。謝安は桓温の病気が重く、その死に近いことを知り、時間かせぎを図ったのである。そうとは知らない袁宏は、訳が分からず王彪之に相談した<sup>(16)</sup>。王彪之から謝安の真意を教えられた袁宏は、以後、謝安の意向に沿って書き直すことになる。結局、謝安のねらいどおり桓温は病死し、東晋の命脈は保たれた。初めは王彪之に教えられたとはいえ、その後は謝安と示し合わせた茶番劇であったと思われる。そもそも当時、袁宏は吏部郎の官にあったと推測されるが、この任官は謝安の推薦によるものであった<sup>(17)</sup>。

また、謝安の知遇を得たといえ、より袁淑に親しい人々の名を挙げなければならない。伯父の袁湛は「少くして従

ます」。謝はすぐに立って舞い、ゆったりとした物腰であった。王公はじつくりと見て、客に言った。「王安豊（王戎）をしのばせるよ」。

また任誕33にいう、

王（濛）と劉（惔）がともに杭南にいたとき、桓子野（桓伊）の家で酒宴を設けた。謝鎮西（謝尚）は叔父の尚書（謝裒）の墓参りをして帰り、埋葬後三日の反哭の礼をすることになっていた。諸人は彼を呼ぼうとして、はじめ一人の使者を遣わしたが、やはり承知しなかった。それでも車を停めたので、重ねて呼ぶと、車をめぐらした。諸人は門外に迎え、腕をとって車から降ろした。わずかに葬礼用の頭巾を脱いで帽子をかぶっただけで、酒宴も半ばになり、ようやく喪服を脱いでいないことに気づいた。

劉孝標注に引く宋の明帝『文章志』に、「性 軽率、細行に拘らず」と記される謝尚だから、もとより任誕篇に載せるにふさわしい逸話が多かった可能性も否定できない。だが同時に、謝尚の任誕的要素を強調することによって、任誕の権化ともいべき袁耽との親近性が増幅されているのも事実である。特に右の逸話の直後に、桓温の借金を博奕で帳消しにした袁耽の逸話を載せるという編集方法は、その親近性の増幅に貢献していよう。それは結局、謝尚という人物に与えられた高い評価が、その人物との親近性を媒介として、袁耽自身に向けられるという構図を描くことになるのである。そこに阮籍や嵇康との関係を通じて袁準の存在価値を示したのと同様の手法を読み取ることが可能であろう。とすれば、『世説』の撰者の中に、袁耽の称揚をめざす人間がいたと考えるのが自然であろう。ここでもやはり袁淑の役割がクロージ・アップされるのである。

ところで、袁氏一族の中で謝尚と関係のあったのは袁耽だけではない。袁準の兄の子孫となる袁宏もその一人であり、それは『世説』の取り上げる所となっている。文学88にいう、

謝仁祖（謝尚）は八歳、父の謝豫章（謝鯤）が客を見送ろうとしていた。当時、すでに談論にすぐれ、一流の人々の仲間入りをしていた。客たちはみな感嘆して言った。「この若者は座中の顔回だ」。仁祖は言った。「座中に尼父（孔子）がいないのに、どうして顔回だと分かるのですか」。

子供時代の謝尚が大人たちに痛烈な皮肉を浴びせた逸話である。謝尚がもてはやされたのは基本的にこうした弁舌の鋭さにあったが、その人格もまた高い評価を得ていた。一例を挙げてみよう。規箴19にいう、

羅君章（羅含）は桓宣武（桓温）の従事となった。謝鎮西（謝尚）が江夏相となったので、それを監査しに出かけた。羅君章は到着すると、まったく政治のことは問わず、ただ数日謝尚と酒を飲んだだけで帰った。桓公が「何があったか」と問うと、君章は言った。「あなたは謝尚をどのような人物だと思われますか」。桓公は言った。「仁祖は私などより優れた人物だ」。君章は言った。「あなたより優れた人物で、非道をはたらく者がいますか。だから何も問いませんでした」。桓公はその意見に感心して責めなかった。

桓温をして己れを上回る人物と言わしめた逸話である。さらにその男ぶりは、東晋初期の大立物、王敦にまさると評される。品藻21にいう、

宋緯はかつて王大將軍（王敦）の妾となり、のち謝鎮西の所有となった。鎮西が宋緯に問うた。「私は王敦に比べてどうか」。答えて言った。「王は使君に比べれば、いなかの貴人にすぎません」。鎮西があでやかに美しかったからである。

このように謝尚は王敦や桓温にまさる人物として描かれているのである。しかし、小論で注目したいのは、先に挙げた袁耽の妹との婚姻を記した逸話のほか、任誕篇に二度見えることである。任誕32にいう、

王長史（王濛）と謝仁祖（謝尚）はともに王公（王導）の掾となった。王長史が言った。「謝掾は珍しい舞いができ

言すれば、自身が後世まで祀られる存在となる権利を確保できたのである。これが中国社会でいかに大きな意味をもつかは言を費やすまでもないであろう。要するに文帝は傅亮を特別扱いしたのである。したがって、文帝治世の元嘉年間に編纂された『世説』の中に傅亮が登場する逸話を収載することについて、撰者たちはそれほど抵抗を感じなかったのかもしれない。ちなみに徐羨之と謝晦は『世説』に取り上げられていない。

以上、『世説』に登場する袁氏の扱い方を見るに、袁豹のように多少の疑問が存する例はあるものの、袁淑を撰者の一員と想定すれば説明しやすい逸話の存在することは確認できたであろう。ただし、それはあくまでも「より合理的」な説明が可能というレベルの話であることを念押ししておきたい。

## 二 袁氏と謝氏

前節で挙げた任誕37の逸話は、袁耽と桓温の親密な関係を示すと同時に、いま一つの事実を伝えている。すなわち袁耽の二人の妹が殷浩と謝尚に嫁したという事実である。この殷浩と謝尚はともに玄談の名手であり、『世説』に多くの逸話を載せる人物である。小論では謝尚を取り上げ、『世説』が彼をどのように取り扱っているか見ておきたい。

謝尚は陳郡陽夏の謝氏の出身で、『世説』のスーパー・スター謝安の従兄に当たり、謝氏が東晋の貴族社会で超一流の地位を得るのに貢献した人物である。袁氏もまた陳郡陽夏の出だから、謝氏と袁氏の姻戚関係は謝尚以前に溯りうる可能性も高いが、まだ確認できていない。ちなみに殷浩も陳郡の人である。謝尚は『世説』に二十五回登場する。これは陳郡の謝氏の中で、謝安を別格として<sup>15)</sup>謝玄とならんで二番目に多い登場回数である。登場回数の多さもさることながら、その評価もきわめて高い。言語46にいう、

効果的であった。『世説』の撰者たちの中にそうした配慮をした人間がいたとすれば、まず第一に袁淑の名を挙げるべきであろう。

さて『世説』に登場する袁氏の最後の人物として、袁淑の父袁豹を見てみよう。彼に関する逸話はわずかに一条、文学99である。

殷仲文は広く豊かな天賦の才を持っていたが、読書の範囲はあまり広くなかった。傅亮<sup>(12)</sup>は慨嘆して言った。「もし殷仲文の読書量が袁豹の半分でもあれば、その文才は班固に劣らないだろう」。

この逸話の中心人物は殷仲文であり、また、それを批評した傅亮であって、袁豹は脇役的存在すぎない。ただ、引き合いに出来ることによって、その読書量、すなわち学識の広範なようすが知られるという構成になっているのである。主役ではないのだから、問題とするに足りないことかもしれないが、この逸話に関して疑問の点がないわけではない。

一つは、袁豹を諱で表記している点であり、一つは、殷仲文および傅亮を主人公とする逸話の中に袁豹を登場させた点である。他人を諱で呼ぶのが失礼であることは常識であり、しばしば『世説』の話柄にもなっている<sup>(13)</sup>。したがって袁淑が父親の諱を称する逸話の収載に同意したとは思えない。むろん右の逸話に登場する人物はすべて諱で呼ばれており、文章の流れとすれば自然なのだけでも、袁淑が平気であったかどうか、疑問は解けない。また殷仲文と傅亮に関する疑問は、前者が劉裕に殺され、後者が文帝に誅された人物であることに由来する。とりわけ傅亮は廢帝を退位させ、文帝を迎えたグループの一員でありながら、元嘉三年(四二六)、廢帝を弑した罪を問われて誅された。このような人物と一緒に父親を登場させることは好ましいはずもないから、袁淑を撰者の一人と想定すると、なぜ『世説』がこの逸話を載せたのか、疑問が生じるのである。ただ傅亮の場合、グループの他のメンバー、徐羨之と謝晦が子供まで死を賜ったのと異なり、妻子の処分は流刑に止まった<sup>(14)</sup>という事実を指摘しておく必要があるだろう。つまり傅亮は子孫を遺す権利、換

緒に勝負をした。一度に十万銭を賭け、すぐに百万銭を稼いだ。しばしば点棒を投げては絶叫し、傍若無人のありさまで、布帽を取り出し、相手に投げつけて言った。「おまえ、やっと袁彦道のバクチが分かったか」。

桓温の借金形の博奕でつけた袁耽の豪胆さを伝える逸話である。桓温といえば、のちに篡位を図るほどの実力を備えた人物である。いかに桓温の貧しい少年時代の話とはいえ、その桓温に恩を売ったことにより、袁耽の評価がおのずと高くなる構成になっているのである。さらに忿狷4も博奕に関わる逸話である。

桓宣武が袁彦道と樗蒲の勝負をした。袁彦道はサイコロの目が合わないので、血相を変えてサイコロを投げ捨てた。温太真（温嶠）が言った。「袁君が八つ当たりしているのを見ると、顔子（顔回）の偉さが分かる」。

最後の顔子云々は、『論語』雍也篇、「顔回なる者あり、学を好み、怒りを遷さず、過ちを弋よびせず」をふまえる。ともかく袁耽は直情径行型の人物であつたらしい。もう一つ彼が登場する逸話は任誕37である。

袁彦道には二人の妹がおり、一人は殷淵源（殷浩）に嫁ぎ、一人は謝仁祖（謝尚）に嫁いでいた。桓宣武に言った。「もう一人、君に嫁がせるのがいなくて残念だ」。

これまた桓温にからんだ逸話である。どうやら『世説』は、桓温という大物を引き合いに出すことによって、袁耽の存在感を強調する方向で編纂されているらしい。そこに『世説』の撰者たちの思惑を読み取ることができないのではないか。そもそも『晋書』本伝によれば、袁耽は蘇峻の乱（三二七—三二九）に際して王導の参軍になり、のちにはその従事中郎になるなど、王導との関係が深い。王導といえば、東晋草創期の最大の功臣であり、大物中の大物である。その王導との関係について、『世説』は一言も触れていない。それは不当と感じられるほど王導に低い評価を与える『世説』の撰述姿勢(11)と無関係ではあるまい。史実はどうであつたにせよ、『世説』に描かれた王導と桓温を比較すれば、後者の活躍ぶりは前者を圧倒する。したがって袁耽という人物の存在の大きさを示すには、王導よりも桓温との関係を述べるほうが

く孫盛『魏氏春秋』と「康別伝」のうち、前者は「康、刑に臨んで自若たり、琴を援りて鼓し、既にして歎じて曰く、雅音、是に於いて絶えたり」と記し、後者はほぼ『世説』と等しい。裴松之は「康別伝」を引いたのちに「(孫)盛の記す所と同じからず」と注している。さらに『世説』の右条の劉孝標注に引く『文士伝』には、「太平引を為す。曲成り、歎じて曰く、太平引、今に於いて絶ゆるなり」とある。このようにいくつか異聞がある中から、先の阮籍がらみの逸話の場合と同様に、『世説』の撰者たちは袁準が登場する話を選択したのである。

そもそも袁準は、『晋書』本伝に、「準、あざなは孝尼、儒学を以て名を知られ、喪服経に注す。官は給事中に至る」とのみ記される人物である。後世、彼の名が語られるのは、右の二つの逸話が『世説』に収録されたからだと言っても過言ではない。くどいようだが右に挙げた異聞を対照してみれば明らかなように、阮籍と嵇康の逸話は袁準の名を出しても出さなくても大差がない。だから『世説』の逸話の選択基準はもっぱら袁準が登場するか否かに求められるように思われる。このような撰述態度は、撰者の一員として袁淑の存在を想定してみれば容易に説明できるであろう。

次に袁準の孫、袁淑の曾祖父である袁耽について見てみよう。儒家的な処世をモットーとした袁氏の人々の中にあつて、「雄豪を以て著わる」(『晋書』本伝)と評される袁耽は特異な存在であつたが、『世説』の描く袁耽像もそうした彼の面目を彷彿させる。任誕34にいう、

桓宣武(桓温)は若いころ貧しく、バクチで大負けした。貸主は矢の催促。自力で切り抜ける方法を思案したが、まったく思いつかない。陳郡の袁耽は、俊秀多芸、桓宣武は袁耽に救いを求めようとした。時に袁耽は喪に服しており、あらぬ嫌疑を招くことを心配したが、試しに告げてみたところ、即座に承知し、少しもためらわなかった。かくて喪服を着替え、喪中の布帽をふところに入れ、桓温について出かけ、貸主とバクチをした。袁耽はもともとバクチのわざで有名だった。貸主は盤につくなり言った。「おまえに袁彦道のバクチなんぞできまいな」。そこで一

求めた。時に阮籍は袁孝尼（袁準）の家にいて、二日酔いで助け起こされながら、木の札に書いた。手直しすると  
ころもなく、そのまま写して使いに渡した。時人は神筆とした。

これは阮籍が「鄭冲の為に晋王を勧むる牋」（『文選』巻四〇）を書いたことに関する逸話である。袁準は脇役にすぎないけれども、竹林の七賢を代表する阮籍と親密な関係を有していたことが明示される構図になっている。ところが阮籍の勸進文執筆に関しては、李善注に引く臧荣緒『晋書』が、「魏帝、晋の太祖を封じて晋公と為し、太原等の十郡を邑と為す。太祖、譲りて命を受けず。公卿将校は皆な府に詣りて勸進す。阮籍、之が辞を為る」と記し、現行の『晋書』阮籍伝も、「会たま帝は九錫を譲り、公卿、将<sup>まさ</sup>に勸進せんとし、籍をして其の辞を為らしむ。籍は沈酔して作るを忘れ、府に詣るに臨み、之を取らしむるに、籍の方に案<sup>つくえ</sup>に拠りて醉眠するを見る。使者以て告ぐ。籍便ち案に書し、之を写さしめ、改竄する所なし。辞は甚だ清壮、時の重んずる所と為る」と記すだけで、袁準の名はまったく見えない。とはいえず、『世説』の記事が撰者たちの創作だというわけではない。東晋の戴逵「竹林七賢論」<sup>(10)</sup>は、阮籍が袁準の家で執筆したと記している。つまり『世説』の撰者たちは、いくつか存在した異聞の中から袁準が登場する逸話を選んだのである。もう一つ『世説』が袁準を取り上げた例を見てみよう。雅量2にいう、

嵇中散（嵇康）は東市で処刑されるに際し、精神状態はふだんと変わらず、琴を求めて弾じ、広陵散を奏でた。曲が終わると言った。「袁孝尼がかつてこの曲を学びたいと請うたが、私は惜しんで伝授しなかった。広陵散はいま絶えることになってしまった」。太学の学生三千人が上書し、教師とするように請願したが、許されなかった。文王（司馬昭）もまたまもなく処刑を後悔した。

嵇康も竹林の七賢の一人で、友人呂安の事件に連座して刑死した。彼が琴の名手であったことは有名で、また死に臨んで琴を弾じたことも歴史書に見える。ただ史書によって記述に相違があり、『三国志』王粲伝に附された嵇康伝の注に引



転任したのが翌年の十月である。『宋書』劉義慶伝に、「太尉袁淑、文は當時に冠たり、義慶、江州に在り、請うて衛軍諮議參軍と為す」とあるから、袁淑の衛軍諮議參軍就任がこの期間内であることは間違いないが、正確な時期は分らない。また袁淑伝にも、「衛軍臨川王義慶、雅より文章を好み、請うて諮議參軍と為す。頃之らくし、司徒左西属に遷る」とあるだけで、劉義慶の幕下にいた期間は明示されていない。ただ「頃之」は短い時間を意味する常套語だから、その期間はさほど長くなかったと推察される。いつ劉義慶の幕下を離れたのか、断定はできないけれども、元嘉十七年七月の袁皇后の死が離任の契機になったのかもしれない。ともかく彼が劉義慶の幕下に在ったのは、せいぜい一年ほどであっただろう。なお、短期間で離任した理由については、のちに改めて論じる予定である。

以上が袁淑の略歴である。直接に『世説』の編纂に参画した事実を示す資料はない。そこで小論では、袁淑と関わりのある人物について、『世説』がどのように取り扱っているかを見ることにより、袁淑の関与の可能性の有無を検討することにしたい。こうした方法を用いるのは、『世説』のような逸話集を編纂する場合、いくつか存在する異聞の中から一つのエピソードを選択して収載するという状況が生じやすく、その選択という作業に撰者の意向が反映されると思われるからである。<sup>(8)</sup>

最初に取り上げるのは、陳郡陽夏の袁氏一族である。『世説』に登場する袁氏の人々としては、袁準、袁耽、袁豹、袁喬、袁宏、袁山松が挙げられる。ただ、袁喬以下の三人は、袁淑から見て六代の祖に当たる袁準の時に分かれた一族であり、かなり疎遠な関係であったと判断されるので、必要に応じて触れる程度にとどめたい。それではまず袁準から見よう。文学67にいう<sup>(9)</sup>

魏の朝廷は晋の文王（司馬昭）を公に封じ、九錫の礼をそなえたが、文王は固辞して受けなかった。朝廷の高官たちは文王の幕府にでかけて説得すべきだとした。司空の鄭沖は急ぎの使いをやって阮籍に勧進の文章を書くように

ら、最も合理的に説明しうるのは、両者がともに『世説』の編纂者であつたという関係であろう。小論で袁淑と『世説』について論じるのも、結局、この関係が成立することを確認する作業にほかならない。

## 一 袁氏一族

袁淑、あざなは陽源、陳郡陽夏の人である。父の袁豹は劉裕（宋の武帝）に認められ、東晋の義熙六年（四一〇）、丹陽尹に拔擢された。袁淑が生まれたのは、その二年前、義熙四年（四〇八）である。『宋書』本伝によれば、初め、州の主簿、著作佐郎、太子舍人に任命されたが、いずれも就任せず、最初の仕官は、彭城王劉義康の司徒祭酒。以後、衡陽王劉義季の右軍主簿、太子洗馬（就任せず）、臨川王劉義慶の衛軍諮議参軍、司徒左西属、宣城太守、中書侍郎、太子中庶子、尚書吏部郎、始興王劉濬の征北長史・南東海太守、御史中丞、太子左衛率を歴任する。一見して気づくのは、太子および諸王に仕える機会の多かった事実である。これは、彼の従姉（伯父袁湛の庶女）が文帝の後妃であつたことと無縁ではあるまい。幼少にして、伯父から非凡さを認められ、文才が豊かで、弁舌も巧みであつたというから、太子や諸王の教育係、補佐役として期待されたのではないか。それが袁淑自身の希望であつたかどうかは疑問だが、文帝や袁皇后などが期待する所ではあつただろう。始興王の軍府に赴任した折、始興王が「舅が属僚に成り下がるとは思ひも寄りませんでした」と述べたのに対し、「朝廷が下官を遣わしたのは、もとより公の幕府における人望を輝かすためです」と答えたという逸話は、そうした事情の一端を示すものであろう。そして太子左衛率在任中の元嘉三十年（四五三）、太子劉劭による文帝弑逆に反対して殺された。時に四十六歳であつた。

一方、劉義慶はといえば、衛軍の將軍号を帯びて江州刺史に赴任したのが元嘉十六年（四三九）四月、<sup>6</sup>南兖州刺史に

の編纂に関与した可能性があるのか、あるとすれば、どのような役割を担っていたのかを考察することにする。

ここで袁淑を考察の対象とするのは、一つには、彼が旧稿の結論に矛盾をきたしかねない存在であり、旧稿の不備を補いたいと思うからである。また一つには、次に掲げる何長瑜の伝記の中に、彼と何長瑜の間に何かしら接点のあったことを窺わせる表現があり、それが『世説』の編纂と無関係でないと思われるからである。

臨川王義慶、文士を招集し、長瑜は国侍郎より平西記室参軍に至る。嘗て江陵に於いて、書を寄せて宗人の何勗に与え、韻語を以て義慶の州府の僚佐を序して云う、「陸展は鬢髪を染め、以て側室に媚びんと欲するも、青青たるは解く久しからず、星星たるは行くゆく復た出づ」と。此くの如きもの五六句、而して軽薄の少年、遂りて演べて之を広む。凡厥の人士、並びに題目を為り、皆な劇言苦句を加え、其の文流行す。義慶大いに怒り、太祖に白し、除して広州の統ぶる所の會城令と為す。義慶の薨するに及び、朝士は第に詣りて哀を叙ぶ。何勗、袁淑に謂いて曰く、「長瑜は便ち還る可きなり」と。淑曰く、「国の新たに宗英を喪いしとき、未だ宜しく便ち流人を以て念と為すべからず」と。

川勝氏はここから何長瑜の『世説』的な生き方を看取し、その撰者にふさわしいことを論じられたのだが、小論で注目したのは引用文の最後、劉義慶の屋敷へ弔問に來た何勗が袁淑に何長瑜の帰京の可能性を語った箇所である。それを非難した袁淑の真意はしばらく措くとして、このエピソードは袁淑と何長瑜の間に何らかの関係がなければ成り立たない話である。ふつうに考えれば、劉義慶幕下の同僚という関係であろう。しかし、右の何長瑜の伝記を素直に読めば、彼が劉義慶の怒りを買って會城令に追放されたのは、劉義慶が荊州刺史であった時期と判断されるから、江州の幕府に招かれた袁淑と時期を同じくして劉義慶の幕下に在職した可能性は乏しい。あるいは伝記に述べられない他の時期に接触する機会があったのかもしれないが、それは完全に臆測の域を出ない。あくまでも劉義慶がらみの話であるはずだか

# 袁淑と『世説』——「世説の撰者について」補論

矢 淵 孝 良

## はじめに

劉義慶の撰とされる『世説』が、実際には劉義慶の著述でなく、その幕下に集った文人たちの手になる書であることは、今日ほぼ定説となつていふに思われる。だが、いかに集団による撰述とはいえ、そこには中心的役割を担った人物がいたはずである。その有力な候補者が『宋書』劉義慶伝に名の見える四人の文人、袁淑、陸展、何長瑜、鮑照であること、これもほぼ異論のないところであろう。

川勝義雄氏は『世説』が「反逆者」謝靈運に関する逸話を取り上げている点に着目し、四人の文人のうち、謝靈運と関係の深かった何長瑜が編纂の中心に位置していた可能性を説かれた<sup>(1)</sup>。私もかつて『語林』との比較を通じ、『世説』の撰述姿勢が陳郡の謝氏に好意的であるところから、基本的に川勝説の成立することを論じたことがある<sup>(2)</sup>。ただその際、撰者については、文人集団として扱い、文人個々のレベルの検討をしなかった。それは、何長瑜に関する川勝氏の詳しい考察があつたからであり、個々の役割をさほど重視していなかったからである。しかし『世説』の編纂過程を明らかにしようと思えば、どうしても文人個々の役割を取り上げざるをえない。小論では袁淑にスポットを当て、彼が『世説』